
COMPASS

海賊ルパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

COMPASS

【NZコード】

N1699E

【作者名】

海賊ルパン

【あらすじ】

時は西暦2614年、場所はフェイルのグローナルシティ。この王家で双子の男の子が生まれた。そしてそのうちの長男が悪魔族であつたことからこの王家の運命が大きく動いていく。本来なら王家に悪魔が生まれたという時点で、即殺害してしまわないといけないのだが、悪魔族は非常に戦闘能力に長けるので、このまま生かしていく計画が立てられた。そして、無条件に戦闘人形に仕立て上げるという計画が立てられた。そして、無条件に生かすことは世間の批判を受けることになるので彼が生まれた瞬間に彼の意思に関係なく契約を勝手に結ばせた。その内容は彼の命

の保障をするかわりに生涯王家に従い続けるといふものである。

第一話「栄光の低迷」（前書き）

これは今から始まる壮絶な物語のほんの先っぽの部分にすがません。
どうぞこれからをお楽しみに。

第一話「栄光の低迷」

「栄光の低迷」

「冗談じゃねえ！！なんで俺がそんなことしなきゃならないんだ！
！こんなへっぽこ騎士団なんかやめてやる！！」

グローナルシティの城の練兵場から廊下にも漏れ聞こえるような激しい罵声が響きその直後に一人の男がイラついた様子で扉を荒々しく閉め出て行つた。

「いいのか、ゴールド？？アイツは現時点での強さを誇ったウチの切り札だぞ？？ただでさえ最近ウチの騎士団の力が低迷してるので、切り札まで失つたらこの栄光はいよいよ終わりだな・・・。」

顔にメカ系のものをつけた男が言葉とは裏腹な、落ち着いた口調でとなりの金長髪碧眼の長身の男に聞いた。

「ああ、いいよ」

ロッドに「ゴールド」と呼ばれたその男が大したことではない、といった口調でサラッとその問いに答えた。

「奴にはもともとこれ以上強くなる見込みがなかつたしね。あれ以上強くなれない奴はいるんだよ。解雇する手間が省けたよ。」
と「ゴールド」はアラカサマにウザかつた、という顔をしてみせ、その後すつきりさわやかな表情で余裕のありそうな言葉を吐いた。

「そうか。何かお前の中に対策があるってことだな？？それなら別にいいのだが・・・。」

ロッドは彼の前向きな返事を楽しみに待つていて、いつのように腕を組んで穏やかに聞いた。

「ナ・イ・ヨ そんな対策なんて。」

彼はロッドに底抜けに明るい笑みをむけながらちょっとした悪ふざ

け混じりの口調で答えた。

ロッドは呆れた、と言わんばかりの冷たい白眼視で彼を一瞥し、その場を離れた。

しかしロッドが「ゴールドの前を横切ろうとした時、「ゴールドが「でも、」と独り言のようこつぶやいた。

ロッドもどうせ口くなことは言わないだらうと感じつつも立ち止まり彼の声に耳をかした。

「今日はなんかいいこと起こりそうなんだよね～っ！…ずっと待ちわびてたことがー！！」

さっきとは似ても似つかない大声でゴールドは叫んだ。

やつぱりコイツは口くなことは言わない。

今日の前で切り札に逃げられたところじゃないか。

ロッドはもう彼の思考とテンションについていけないと感じその場を離れた。

第一話「栄光の低迷」（後書き）

今はまだきっと意味がわからないと思いますが、これから面白くなつていくのでどうぞ、最後までお付き合いください。

第一話「小癩なガキ」

「小癩なガキ」

すると突然練兵場の扉が開いた。

切り札が帰ってきたのかと一瞬期待した一同だったが期待ハズレにも扉の向こうから現れたのはまだ年端も行かない少年だった。その少年を馬鹿にするようにこの騎士団でも柄の悪いグループのたちが彼に笑い混じりに話しかけた。

「おいおい、坊主。ママを探しにきたのか??そーじゃねえなら帰つた帰つた。ここはお前みたいなか弱いガキが来るところじゃねーんだよ。泣かされたいなら別だがな」

少年を見下すような笑い声の後彼らは少年の周りを囲み、威圧的な態度で少年を追い出そうとした。

すると少年が口を開いた。

「お前たちに用はない。俺は入団者審査員の者に会いに来た。そのものに会わないとには入団できないようなのでな。邪魔だ。道をあける。」

少年はとても子供らしくない落ち着き払った口調で「ゴールドへの面会を申し出た。

ゴールドはまさかの客のまさかの「指名に少々驚きながらも「こんな治安の悪いとこにいきなり現れていきなりこの僕を」「指名かあー。勇気ある少年だね（笑）しかも入団志望だつていうじゃないか。」

といいながらゴールドは珍しい勇児の顔をもつと近くで見たいと思い、彼に近づいた。

そして柄悪グループをかきわけ、彼の顔がはっきり見える位置で言

葉を続けた。

「ここに来たんだからここに入団許可年齢が18歳以上だつてことくらいはいくら「ボオヤ」でも調べてきたんだよね。いつとくけど僕ら「オトナ」は「ボオヤ」の遊びに付き合つてられるほど、暇じやないんだ、これが。」

ゴールドは皮肉混じりに小生意気なガキにこれでもかと言わんばかりに強い言葉で向かいつた。

いつものゴールドらしくなく、不気味なほど落ち着いている。彼が腹を立ててているのは誰もがわかることだった。そして彼のいってることは、ここの中員の誰しもが言いたいことだった。

だがこれだけ言われも少年は表情も変えずにやはり落ち着いた口調で「ああ、知ってる。だがその辺の18歳以上の人間よりはお役に立てるはずだ。あと、子供だから遊びととられがちだが、俺は本気でここに入る気できたのだ。あなたのその態度は俺に対するこの上のない侮辱だ。」

とゴールドに対する皮肉をこめていった。

ゴールドは最初このムカつくガキを追い出してやれりうと思つたが、彼の熱い思いを秘めた瞳を見て

「そーいわれちゃ仕方がないなあ。」

といい、彼の正面にたつた。

確かに彼の顔はむしろここにいる命がけで戦つてゐる騎士たちよりも強い意志を持つたい顔をしている。

ゴールドはその顔をみて満足した、という表情をみせ、続けた。

「そこまで言つなら一回僕と勝負してみる??もちろん子供相手だからといって手加減はしないつもり。僕に勝つたら入団を許可してあげる。でも、負けたら即帰つてもらうからね。」

少年は微笑みをうかべ

「交渉成立だな。」

といつて手を差し出した。

ゴールドもその手をしっかりと握つて和解の意を表した。

するとそれの内容に納得がいかなかつたロッドが不満そうに反論した。

「『ゴールド、俺はお前の考えがわからない。ガキを入れたところでの騎士団には何の特もない。それなのになぜ戦う必要がある？？俺はもうお前の気まぐれにつき合わされたくないぞ。』

するとゴールドは

「まあそーいうなよ。もしかしたらこんなちつこいけど有力候補かもしけない。試すだけならタダだしね~。」

と楽しそうに答えた。

ロッドはまだ納得いかない様子だったが、これ以上何をいっても彼は聞かないだろうと思ひ引き下がつた。

第三話「バケモノ同士の決闘」

「バケモノ同士の決闘」

「じゃあ戦う準備しなきやね。1時間後に下の階のスタジアムで待つてるね。ちょっと時間は短いけど、武器の調整くらいならできるだろうから。」

そういってゴーレドは準備室にこもった。

少年は調整くらいどこでも構わないというようにその場に座つて剣の手入れを始めた。

両者のどちらにとつてもこの1時間は非常に早く感じた。

あつという間に時が過ぎ、「その時」がきた。

ゴーレド、少年ともに10分前にはもうスタジアムにきて武器の最終チェックをしていた。

少年は落ち着いた表情をしていたが、内心ゴーレドの持つている武器をみてどぎまを抜かれていた。

斧だ。それもとても巨大である。目測だが、ゆうに400キロはありそうである。

普通ゴーレドぐらいの体格では、通常の斧でも扱うのは非常に困難である。

それも、彼の扱う斧は40キロ級と重とも大きとも常識はずれである。

だがその斧をあえて扱うのだからよっぽどの実力があるのだろう。

少年はそんなことに感心しながら自分の武器の手入れに力をいた。だが、武器に驚いたのは彼だけではなかつた。ゴーレドも少年の使う武器をみて驚いた。

剣は剣でも彼の背丈よりも大きいロングソードである。しかも彼の扱う剣は両手片刃剣、刀のような形のアレである。両手片刃剣は扱

いが相当難しい。

無論普通は到底彼ののような小さな少年が扱える代物ではない。それを当たり前のようく振つて居る彼をみて「ゴールドも感心していった。

「審判はロッドにやつてもうから。君の剣が僕に触れた時点で君の勝ちだよ。君は戦えなくなるまで負けにはならないから安心してね」

ゴールドはいつもどおりのテンションの高い声で試合の説明をした。少年は黙つてゴールドの説明につなぎいた。

「おい、早く始めるぞ。位置につけ。」

待ちくたびれたロッドがしひれを切らして二人をうながした。

「わかったよ」。怖いな～ロッドは・・・

ゴールドは愚痴をいいながら位置についた。しかし、位置についた途端、急にファイターの表情になつた。

少年も位置につくと少年のあどけなさは消え、騎士の顔になつた。ロッドは二人の変わりように驚きながらも

「準備はいいか？？」

と声をかけた。

「おつけ～」

とゴールドがハイテンションで答へ、少年は黙つてうなぎいた。

その返事を聞いてロッドが「レディ？？」と声をあげると二人はにらみ合つた。

「ゴーーーー！」の合図で二人は同時に地面を蹴り、飛び出した。

第四話「最強の彗星」

「最強の彗星」

剣と斧が重なり合い、激しい轟音が響いた。

少年は剣士特有のスピードを生かして「ゴールドの周りをものすごいスピードで回り、彼の大きな動きの攻撃を外させ、そこに追撃をいれようと考えていた。

それもその筈、少年は斧使い＝ノロイというイメージを持っていたからだ。

しかし、その考えは、一瞬にして変わった。

なんと、「ゴールドはスピードアタッカーである少年とほぼ同じスピードで動いているではないか。

それどころか、斧を振るスピードまで、まるで空気を振っているかのように軽やかである。

少年はこれはマズイと感じてか、バックステップで一旦間合いをとり、遠めから銃で攻撃し、ゴールドの隙をつこうと考えた。やはりこれだけの強者を相手と対峙するとなると、フェアに戦つたところで負けは見えている。これくらいのズルは仕方ないだろう。しかし、この作戦もまたもや破られることになった。

少年が間合いを取った瞬間、突然風の刃が彼の頬や手足をかすった。ゴールドはグラウンド・マジックという特殊な魔法が使える戦士でもあったのだ。

この魔法は詠唱やモーションがないので、かわすのがとても困難である。

これを使わせるくらいならまだ、接近戦のほうがわずかだが勝ち目がある。

少年は仕方がなく一か八かの賭けにでた。

「ゴーレードの懷に突っ込んでいつてすばやく突きを繰り出した。これは下手をすれば命にもかかわる決死の行為である。だが結局少年は入団者審査員の強さに圧倒される形で試合を終えることになった。ゴーレードは彼の突きを見切っていたのかすばやくその突きを払い、そのまま彼の持っていた剣を遠くに吹き飛ばすと、すばやく彼の喉元に斧の刃を突きつけた。

この時点でもう何をしても彼の斧に阻まれるだけである。

少年は彼が狙つていた最後の効果をしばらくまつっていたが、それが起こらないことを確認すると静かに目を閉じ「降参」の意を表した。それを見たロッドがやっぱりな、といったような表情で掛け声をかけた。

「挑戦者、戦闘不能。勝者、ゴーレード。」

「なんだなんだ？？もう終わり？？なんか刺激が全然なかつたんだけどお～・・・やつぱ時間の無駄だつたか～。」

とゴーレードがつまらなさそうにつぶやいたのを聞きロッドは、「ま、まあ・・・、最近の挑戦者の中ではもつたほうだよ。」

と挑戦者をかばつた。実をいうとロッドはその少年の強さに心底驚かされていた。ゴーレードという「バケモノ」に負けはしたもの、その洞察力や状況判断のはやさには一日おけるものがあったからである。

このまま手放すのは非常に惜しい。

だがそのロッドの心とは裏腹に、少年は落ちた剣を拾つてゆっくりとしまつと悪夢のスタジアムを去るなりとしていた。

しかし、ゴーレードが斧をしまおつとすると、「バキッ」という乾いた音が響いた。
それは頑丈この上ないゴーレードの斧が根元から情けなく折れる音だった。

きちんと武器の調整はしたのだから、偶然に折れるところとは、まずありえない。ところとはあの少年によつて折られたとしか、考えられないのである。

実はこれこそ試合中、少年が狙っていたことであった。

「ゴールドは思わず少年を呼び止めた。

「待つてよ坊や！――これをみてくれ！――僕の斧が、僕の頑丈な斧が根元から折れた……。もしあの時これで君を切りつけたとしてもこの状態じゃ意味がなかつた。この勝負は君の勝ちだ。」

彼は振り返り、しばらくその言葉の意味がわからなくて呆然とその場に立ち尽くしていたが、ようやく「合格」の文字をかみ締めた。少年は念のため彼に念をおして聞いた。

「……ということは、俺がこの騎士団に入団することを許可してくれるんだな？？」

「うん モ・チ・ロ・ン 、え～と名前は……。」

「榊騎士だ。これからは俺も一騎士としてこの国のために尽力しよう。」

騎士は名を名乗ったあと手を差し出した。

「ナイトかあ～！！ゴツイ名前だな～。でも、騎士にはピッタリの名前だね。じゃあこれからよろしくね、ナイト！」

ゴールドは差し出された手をしっかりと握った。

世界最年少騎士の誕生だった。

第五話「大切な人」

「大切な人」

「つてか君さあ、なんでその歳で騎士にならうと思つたの?? もしかしてスーパー・マンにあこがれて??」

ゴールドは軽いジョークを混ぜながら、彼が来たときから氣になつていたことを質問した。

するとナイトはさつきとはうつてかわつて微笑みながら優しい口調で答えた。

「守りたい者がいるからだ。俺が強くなれば、彼女を守ることができるからな。」

こんなちびっこからこんなクドイ言葉をきくことになるとほ思わなかつた。

ゴールドはなんてませたことこうガキなんだと思いながらなぜかいテンションで返答した。

「おー!! まだそんなチビなのに愛する女がいるのかー!! やっぱりマドキのお子様は言うことが違うねー!!」

しかしナイトは「ゴールドのいつていることがわからない」といったげな表情でため息混じりに反論した。

「違う。俺の知り合いの女性だというだけだ。それに俺よりだいぶ年上だしな。」

その返答を聞いて、ゴールドは

「なんだよ~。そういうオチかよ~。やっぱまだ早かったか・・・。

と何を期待していたのかがつかりしながら言つた。

「ただいま、ゴールド。ちゃんと仕事をしてる?? あら、その子はもしかしてナイトじゃないの??」

そのとき再び練兵上の扉が開き、一人の美しい女性が澄んだ声で「
ールドに話しかけてきた。

「ああ、マリア！－！オカエリ そうだよ～、今日、というか今、僕
らの仲間になつたんだ。つてか君コイツと知り合いだつたの？？そ
れならそつと一言いつてくれればよかつたのにい～。」

ゴールドは忠犬ハチコウのように満面の笑顔で彼女にかけようと、
子供のように純真な目で彼女の言葉に応答した。

「えつ！？この子を採用したの？？ということはこの子はあなたに
勝つたということなのね・・・。いつの間にこんなに強くなつたの
かしら・・・。」

「ゴールドはほりょくと嫌なことを指摘され、複雑な表情で答えた。

「えつ・・・あ・・・うん・・・。まあね。でつでも、僕が弱くな
つたわけじやなくてコイツが・・・。」

「ゴールドが言い訳しようとすると彼女は笑顔で

「わかつてるわよ、ゴールド。あなたはとても強いもの。それは団
長である私が一番わかつてることだから「言い訳」なんていう自分
の努力を台無しにするようなことしないで頂戴。」

と優しく叱つた。

「あなたが・・・」この団長？？

「団長」という単語を聞いた瞬間、ナイトは困惑の表情を浮かべた。
「ああ・・・、黙つててごめんなさい、ナイト。まさかあなたがこ
こに入団するなんて思つてなくつて・・・。ほら、女性が騎士、し
かも団長してるなんてちょっと珍しいじゃない？？別に特別な意味
はないけどなんとなく言えなかつたといふか・・・。」

彼女はナイトの表情を見て必死に説明を加えた。

こんな説明じやきつとコイツは納得しないだろうと「
ールドは思つたが意外にもナイトは笑顔で

「そうか。なら俺はいつかあなたよりも強くなつてあなたを守り抜
ける存在にならう。」

と歯の浮くようなセリフをはいた。

第六話「彼らの関係」（前書き）

第六話「彼らの関係」

「彼らの関係」

ナイトの返事を聞いて安心したのか、マリアは
「まあ、頼もしいわね。じゃあ守つてもういちやおつかしく
と嬉しそうに答えた。

すると「ゴールドは面白くない、といった顔で
「えへ、じゃあ僕はもう払い箱??もう僕のことは頼つてくれな
いの・・・?？」

と寂しそうに答えた。

マリアは子供をなだめるように優しく返答した。

「うふふ、ゴールド。そんなことないわよ。あなたは強いもの。こ
れからもバリバリ働いてもらひつもりよ。子供相手に駄々こねない
の。それよりロッドは??彼に私がいなかつた間の報告をしてもら
わないといけないんだけど・・・。」

マリアは騎士団にいるものの、性格が非常に温厚なので騎士団の中
でも男女問わず人気がある。

彼女が来た途端、彼女の癒しオーラを恩恵を受けようとたくさんの
人々が集まつてくる。

その間をぐぐり抜け、ロッドがやつとの思いで姿を現した。

「報告が・・・送・・・れて・・・申し・・・訳・・・ござい・・・
ません・・・。今日・・・は・・・一人・・・。団員が・・・加わ・・・
・りました・・・。」

毎度のことながら人の壁を抜けるといつのは重労働である。ロッド
は息も切れ切れに報告を済ませた。

「あらロッド・・・。「ごめんなさい。」んなといひまで」せせせせせせ

つて・・・。加わった団員とこいつのはナイトのことね?? わかったわ。
「苦労様。」

マリアはロッドの状態を見て、申し訳なさそうに返事を返した。
さすがにこれ以上団長に謝りせるのは気が引ける。まだ疲れてはいるものの、もうそんな姿は見せまいとロッドはわざと元気そうな姿で言った。

「そうです。彼が新人です。団長にまで心配をおかけして申し訳ありません。もう大丈夫です。」

ロッドはそこまで言い終わると、次はナイトの方に向き

「あ、そうだナイト、入団の手続きがあるから俺についてこい。」

と彼を呼んだ。

ナイトは黙つて彼のもとへ行つた。

彼の行動を確認するとロッドはマリアに一礼し、ナイトとともにその場を後にした。

ナイトは早足で前を歩くロッドに追いつき、素朴な疑問を聞いてみた。

「なあ、ロッド。『ロードはマリアとどうこう関係なんだ?? 友達とはどこか違うよ?』だが・・・??」

「ああ・・・? そのことか。お前はホント、ませガキだなー。さつきのお返しか??」

ロッドはだるそうにこうと、続けた。

「『ロードにとつてマリア様の存在つていうのは確かにかけがえのないものだ。だが、恋人同士ではない。マリア様はもう結婚しているしな。あいつからみれば・・・まあ、恩人みたいなものかな。』

「恩人??」

ナイトはもつと深く追求したがロッドは

「そこから先はあいつのプライベートに関わるから俺が話せるようないふではない。聞きたければあいつに聞くんだな。」
といつて立ち会ってくれなかつた。

第七話「運命が動き出す」

「運命が動き出す」

今日は寒い。

どうやら外は雨が降つてゐるようだ。

冷暖房完全完備の城内も、さすがに隅から隅まで暖めることはできないらしい。

もつとも、彼らが寒いのはビリやら体だけのことではないよつだ。

彼らの目の前を大きな棺がゆっくりと進んでいく。

騎士団の全員が今日は仕事を休んで、この式に出席した。

彼らはわざと棺を見ないよううつむいたまま、黙つて彼女を見送つた。

その瞳に、うつすら涙を浮かべている者もいる。

それもそのはず。この葬儀は、彼らを昨日まで率いていた団長、マリアの葬儀だからだ。

誰もがこの人の死を受け入れることができなかつたが、一番ショックを受けていたのが、命に代えても絶対守ると誓つた人にたつた6ヶ月で先立たれてしまつたナイトだつた。

その悲しみは、はかりしれないものがあつた。

マリアと過ごした日々は、とても楽しい思い出ばかりだつたが、それでも今、彼らの心を埋め尽くすのは悲しみだけだつた。葬儀が終わつても彼らの悲しみはおさまらなかつた。

「なんで・・・、なんで・・・、あの人気がこんなことに・・・? ? ?」

一人の騎士が、かすかに聞こえるような声でつぶやいた。

その問いに、ゴーレドが珍しく力ない声で答えた。

「わからないな・・・。でも、あんな完璧な人でも嫌われることがあるんだね・・・。僕は守りきる自信あつたのにな・・・。それ

にしても、僕が団長になるのを見ててくれるつていってたのに、僕

が団長になる前に逝っちゃうなんて・・・薄情だよね！！」

「ゴールドはそこまで言い終わると、トライアに行くところで逃げるようにならうにその場を去った。

「ゴールドの様子をみたロッジが、ナイトの姿がないのに気がついた。あいつ・・・どこいったんだろう？？と気にはなったものの、今はそつとしておこでやうつと思ふ、その場にどびました。

3日後・・・

葬儀の日とはうつてかわって、快晴だ。

快い太陽の光に皆の心もほんの少し晴れた。

大人といつのは皮肉なもので、悲しいことが起きてもそこじどまり続けることができないのだ。

「ゴールドやロッジをはじめとする騎士団の皆は意氣揚々と練兵場にきた。

「やつはー 今日もガンバローーー！」

「ゴールドはいつもハイテンションで彼らに挨拶した。

「おひ。ゴールド。お前は何があつても元気だなー。」

ロッジはため息混じりに返事をした。

しかし、言動とは裏腹に、ゴールドの明るい態度に安心感を覚え、内心ホッとした。

そのとき、練兵場の扉が開く音とともに、ナイトが現れた。

「おお、ナイトか！ 3日も現れないからもう来ないのかと思ったぞ。」

ロッジはさつきの気持ちの尾を引いているせいか、明るくナイトに話しかけた。

しかし、ナイトからの返事はなかつた。

結構大きな声で話しかけたのだが・・・聞こえなかつたのだろうか・・・？？

疑問に思いながらもロッジはもう一度彼の方をたたいて話しかけて

みた。

「おい！…聞いてるのか？？」

「・・・・・俺にさわるな・・・。」

どういうことだらうか。確かに以前もどこか大人びていたところはあつたが、ここまで冷たい口調ではなかつた。やはりマリアが亡くなつたことがよっぽどショックで話せないほどなのか。しかしそれにしては表情がいつもと変わらない。

ナイトはたつた3日のうちに心がロボット化していた。

第八話「提案」

「提案」

しかし、マリアは死の直前に、ナイトに剣を残していた。

それは騎士の中の騎士しか使うことが許されない「ソード・オブ・キング」という特殊、かつ呪われた剣だった。

この剣は装備者に絶大な力をあたえるかわりに、世界一強いとされる騎士以外のものが使うとその魂を吸い取られるという恐ろしい剣だ。

しかし、マリアはナイトの急激な成長ぶりを見てこれはもう、自分が持つべきものではないと判断したらしい。

だからあえてそれをナイトに託したのだ。

しかし、彼女の死から3ヶ月たった今でも彼はそれを使おうとした。い。

恐れからなのか、それともその強さゆえなのか・・・。そう考えさせられるほど、彼は強くなりすぎていた。

それを言付けるように、練兵場でまた一人、彼の手によつてその尊い命を奪われた。

それを見かねて、ロッドがつぶやいた。

「マリア様がなくなつて以来、あいつは感情つてやつを忘れちまつたみたいだな。仲間まで殺すなんて・・・。次は俺たちかもな、なあ、ゴーレドっ？」ロッドは隣でサッカーをしながら棒つきキャンディをなめて、ゴーレドに返事を求めた。

「ほうふあふえ～、ほうふいふあふいふあふあふえ～。」
何を言つているかわからぬ

「・・・早く飲み込め。」

ロッドは呆れて顔で遊びをやめないゴーレドをみた。

「ゴールドはキャンティを噛みながら続けた。

「これで17人目、見方が殺されるの。そろそろ手を打たなきゃバイね〜・・・。でも僕あんなバケモノと話したくないな〜。だつて・・・。」そこまでいふとゴールドは首を切られるジェスチャーをし、続けた。

「いりされそうじやん・・・マジビビッちやうみね〜〜！」

「わうはいっても一応お前は団長なんだから。あいつだつてお前のいわいとなら聞くはずだ。ちょっと次の任務がひかえてるんだろう？」

？」

ロジードはグズグズしているゴールドをせかすように念を押した。

「わかつたよ〜。せつかちなんだから〜。」

ゴールドはだるそうに返事をすると、剣についている血をふいているナイトにさりげなく近づいた。

「ねえ、ナイト。次の任務はジスニアの視察だね。だから〜、僕から提案なんだけど、・・・武器を持っていかないっていうのはどうかな〜？？」

前のナイトなら絶対に反論しそうな内容だ。しかし、彼は表情ひとつ変えずに承諾した。

第九話「郷帰り」（前書き）

第九話「郷帰り」

「郷帰り」

「にしても相つ変わらずつまんない街だな。カジノひとつない
なんて・・・。あるのは研究所ばつかじやん!!」

ゴールドは何を言つても返事ひとつ返さない相棒との何の面白み
もない研究者の街ジスニアの様子をみて思わず愚痴をこぼした。
さつきから何度あいさつをしても、なんと話しかけてもナイトは返
事ひとつしない。

これでは、ただでさえつまらない視察が余計つまらなくなる。

ゴールドはイライラする心を落ち着けるためか、煙草に火をつけた。
「いいかい??ナイト。僕はここに残る。君が街の視察をしてくる
んだ。何かあつたらここに戻ってきてね でもね、何があつても人
を殺しちゃダメだよ!! 君への今回の任務はあくまでこの街の視察。
まあレディを助けるとかなら仕方ないけどね 身寄りがない人とか
見つけたらここにつれてきてね。じゃ、いつてらっしゃ~い」

ゴールドはハイテンションのくわえ煙草でナイトを見送った。

しかし、内心ではナイトが街中で人を殺し、騒ぎにならないかとて
も不安だった。

だが、ゴールドの心配をよそにナイトはきちんと言われた通り人を
殺さず、困っている人を助けながら順調に街の視察をしていった。

街の様子を見ながら今度はガムを取り出してゴールドは、このまま
の状態でナイト帰ってきますようにと願いながらのどかな街の午後
を見ていた。

しかしそのとき、「ゴールドの恐れていた事態が起きようとしていた。

「おいおい、お譲ちゃん、パパはどこにいったかつて聞いてんのが
分かんねーのか!!」

「いい加減にしねーと今度はお前をじばくぞ口う…」

なにやら穏やかではない声を聞いたナイトが声のするほうを見た。そこにはマフィアと思われる強面の男たちがちょうど自分と同じ年くらいの女の子に怒鳴っている様子が見えた。

「ターゲット、発見。」

ナイトはそういうと彼らの元へと近づき、彼女を殴ろうとしていた男の手をつかんだ。

「なんだ?? このガキ!! 僕らとケンカしよーってのか?? 上等だ!!」この嬢ちゃんもろどもブツ殺してやるぜ…」

そういうとその男がナイトに殴りかかってきた。

第十、十一話「無言の少女」「仲間」（前書き）

第十、十一話「無言の少女」「仲間」

「無言の少女」

「攻撃確認。防衛機能発動。」

ナイトはそうつぶやくと、今度はその男の攻撃を受け流し、みぞおちに拳を一発入れた。

男は思わずその身のこなしと力の強さの前になすすべなく絶命した。

「い・・・このガキつ！…」

他の仲間たちも攻撃してきたが、ナイトはすべて攻撃をかわし、自分より2倍は背丈がありそうな男たちをすべて一発の攻撃で殴り殺した。

そして彼女のほうに向こうに直りナイトには珍しく

「怪我はないか？？」

と話しかけた。

彼女は首を縦に振ったが、そのままナイトにおびえているようだつた。

その様子を見てナイトは

「俺は任務で彼らを抹殺しただけだ。お前には危害を加えない。安心しろ。」

と、自分に敵意がないことを伝えた。

彼女は言葉の意味がよくわからない様子だったが、とりあえず敵意がないことだけはわかつたらしい。

「親はどうした？？まさか一人ではないだろ？？な？？」

ナイトの質問に彼女は困っている様だった。

その様子を見て彼の思想はある場所に行きついた。

「お前、声が出ないのか？？」

すると彼女はゆっくりうなづいた。

「仲間」

いたわか待ちくたびれていたゴールドの前にナイトがよつやく帰ってきた。

ゴールドの足元には大量の煙草の吸殻や棒つきキャンディーの棒が落ちていた。

「おかげり~ 遅かつたね~。ん??隣のプリティーな女の子は誰??」

「名前はわからない。どうやら声が出ないらしい。マフィアらしき男たちに囮まれていたところから推測すると、親は何らかの理由で蒸発した可能性が高い。」

「蒸発ねえ・・・なんだか穏やかじやないじやない??身寄りがないなら親が見つかる城に置くしかないけど・・・。」

ゴールドはあの事件以外まったく口をきこうとしなかつた彼がこんなによく話すことなどがとても疑問だつた。

「それにしても今日は珍しくよくしゃべるね~。」

だからなのか、彼の中にもしやという発想まで生まれてしまつた。

「もしかして、僕のこと・・・やだ!! そんなの困るよ!! 僕は女性専門なんだから!!」

しかし、ナイトは彼の意味のわからない言葉を無視し、話を続けた。
「それが妥当だな。このまま家に帰したところでまた彼らの仲間に襲われるだけだからな。お前もそれでいいか??」

ナイトが少女に同意を求めた。

彼女は次々に出てくる怪しい連中に口悪いながらも、彼の意見に首を縦に振つて同意した。

「そうと決まれば城に帰還することだな。航空機を出せ。」

「なんで僕のほうが偉いのに君は命令形なの??」

ゴールドは不服そうに言つたが、ナイトは彼を無視して彼女とともに航空機に乗り込むとエンジンをかけた。

「無視かよ～。つてか、おこおこおこおこ……置いてかないでよ～！～！」

『ゴールドマダガスカル』とあわてて航空機に乗り込んだ。

第十一話「一人のこれから」

「一人のこれから」

「…………」「ゴールド。……これはどうこうとか説明していくか?…やつと帰ってきたと思つたら見知らぬ少女を誘拐していくなんて……。」

少女を見るなりロッドは「ゴールドに聞いた。

「ヨイツが女好きなのは前から知っていたことだがまさか犯罪まで犯すほどだとは思わなかつた。

するとゴールドはすぐさま反論した。

「ち、違うよ……」の子は僕が誘拐したんじゃなくてナイトが誘拐したんだよ!—!」

あくまで誘拐したことは否定しないのか。

「なんだって!/?ナイトが!/?そいつが、ナイトはいつもこの女の子が好みなんだな。」

ロッドはそういううなづくと続けた。

「……で、なんで誘拐してきた?/?」

「なんか、ヨイツが言うには、」

と、ゴールドはナイトを指差し、

「マフィアかなんかに襲われてたんだって。喋れないらしいし。あ、おまけに身寄りまでないと来た。」

「そうか。それならしおうがないな。」

「そゆこと、そじやなきや僕が誘拐なんとしてくるはずないじやん!—!」

ゴールドがそう自信満々にしゃべると、ロッドはびつだかな、といつよつと首をかしげた。

その後ロッドはナイトに聞いた。

「それでその子の住む部屋だが、今空き部屋がない状態なんだよな。・・。そこで、だ。ナイト、お前の部屋においてやるってのはどうだ？？お前が連れてきたわけだし、文句ないだろ？？彼女も、どうだ？？」

少女は元気よくうなづいた。

「・・・御意。」

ナイトも冷たいが、はつきりと返事を返した。

「えへ、そんなこと言つちやつて、ナイト君。もしかして犯しちゃおうとか考へてるんじゃ・・・。」

「やうと決まればさつそく部屋に行くか。ナイト、案内してやれ。ロッジではゴーラードに最後まで言葉を言わせずに続けた。

「・・・承知。」

「・・・無視しないでよ～。」

「ゴーラード、黙れ。」

「うい。」

ロッジはあまりにも黙らなゴーラードを黙らせ、少女のまつ毛を向き直つた。

「じゃあ後はナイトについてけばいいから。」

少女は静かにうなづいた。

第十二話「氷の心」

「氷の心」

ナイトは少女を自分の部屋に案内した。

風呂などの使い方を一通り説明すると、彼は考えた。

事情を聞こうにも、話せないとなるとともに難しい作業になる。せめて彼女の名と親の名くらいは聞ければいいのだが。

そこで彼はだめもとで彼女にあることを聞いてみた。

「お前、文字は書けるのか??」

しかし、彼女は首を横にふった。

やはり駄目か。ならばと彼はもう少しランクを落として聞いてみた。
「では、親が自分の名前は書けるか??」

すると彼女は机の上のペンと紙を手に取ると文字を書き出した。
文字、というよりはほとんど絵に近い感じだがそこにはなつきりと「れいな」の文字が書かれていた。

「それはお前の名か??お前はれいなと言つのか??」

すると彼女は静かに首を縦にふった。
だんだん希望がみえてきた。

彼はそれならばと親の名がかけるか聞いたが、それは無理なのか彼女は躊躇して書かなかつた。

「そうか、ならばもう良い。今日は疲れただろう。ゆっくり休め。
ナイトはれいなに彼らしくない優しい言葉をかけると、武器の手入れを始めた。

彼女はうなずいたが、剣や銃などの普通では見られない代物たちに興味津々の様子だ。

彼のそばを離れようとしない。
それに気づいたナイトは

「なんだ、お前。これが気になるのか??それなら一度武器の手入

れをしてみるか？？」

と聞いた。

するといいなは満面の笑顔で嬉しそうに大きくなづいた。
感情を失いかけていたナイトだったがさすがにこの笑顔には心を動かされた。

人の感情を動かす為には、偽りの感情は必要ない。

本当の心からの感情を表し、全力でそれを表現することで初めて人の心を動かすことができるるのである。

ナイトは彼女につられてか、微笑み混じりに

「そうか。なら俺が指示するからやってみる。」

といつて銃を手渡した。

重たいからなのか、慎重にしているからなのか、彼女は銃を両手で受け取ると、彼の指示に従い手入れを始めた。

いつもなら、面白くもなんともない手入れだが、今日の手入れは何か特別なものがあるらしい。

彼女は話すことはできなかつたが、その一日、彼らの笑顔は絶えなかつた。

第十四話「知り合い」

「知り合い」

確かにれいなと過ごす日々はナイトにとって少なくない安らぎを『』
えているのは確実だつた。

しかし、そうやって楽しく過ごしているだけでは、「ゴールドやロッ
ドから言われた「彼女のことを聞き出す」という任務をこなしてい
るとはいえない。

ナイトは考えた。

話すことのできない彼女からどうやって「彼女の事情」を聞き出せ
うか。

考えた末思いついたのが「テレパシー」の応用だつた。

テレパシーを使えば、彼女が話せなくとも、彼女に触れるだけで彼
女の考えていることがわかるのである。

さつそくナイトは「ゴールドの元を訪ねた。

「任務のことだが、テレパシーを使おうと思つていてる。お前の知り
合いで、テレパシーに詳しい奴はないか？？」

ゴールドは、せっかくの一服の時間を邪魔されて不機嫌そうに答えた。

「んんっ？？ああ・・・、それならリオ・ランゴットってやつを訪
ねるといいよ。あいつ変人だけどテレパシーについては詳しいから。

それにしても君は彼女のことになるとホント真剣そのものだね～」

「そうか。わかった。そいつはどこにいるんだ？？」

「ジスニアだよ。れいなちゃんとあつたあの街。」

そういうてゴールドはペンのキャップを口でとると、紙に地図を書
き出した。

さすが、グラウンド・マジックの達人というだけはある。

「ゴールドはリオの家の周辺の地図をあつとこいつ間にすりあらじと書や、それをナイトに渡した。

「はい、これ。」の通りに行けばいいよ。」

「わかつた。ありがとう。」

すると「ゴールドは田を見開いて

「あ、ありがとうー？君の口からそんな言葉が聞けるとは思わなかつたなー。やっぱ、男ってのは女がいると変わるもんだよねー。」

とニヤニヤしながら言った。

しかし、ナイトはそれを無視し、一礼して練兵場を出て行った。

第十五話「掴めない男」

「掴めない男」

「ここか。」

街から少しわき道にそれた、田だたなさうかる場所にその家はあった。

ナイトはノックしたら壊れてしまいそうなボロードアを慎重にノックした。

「・・・」

返事がない。留守なのだろうか。

ナイトはもう一度ドアをノックした。

すると突然ドアがゆっくり開いて中から中性的な顔立ちの男が出てきた。

「ノックはしないでいただけますか？？ドアが壊れるので～。」

やはり壊れるのか。

「そこにベルがあるじゃ～ですか～。」

といつて男はドアの隣にくつついているカメムシを指差した。

あがべるなのか・・・。

「申し訳ない。といろで、あなたがM・リオ・ランゴットか？？」

そうでなければ話す意味がない。

すると男は優しく微笑みながら、答えた。

「ええ。そうですよ～。この家は私一人しか住んでいないので～。」

今一緒に住んでくださる方を募集中で～す」

そういうつてリオはナイトに何かを訴えかけるような目で見た。

ナイトは嫌な予感がしたのではっきりと首を横に振った。

「そうですか～。残念で～す。それで、今日はどんなご用で～？？」

「あなたはテレパシーという技術について詳しいと聞いた。俺は今、

任務でどうしてもその技術が必要なのだ。俺にテレパシーを教えてほしい。」

「それはいいですけど……。」

そういうとリオは黙つて考え込んでしまった。

「何か問題があるのか？？」

「はい。大変失礼だとは思うのですが、この技術は子供が理解して扱えるほど、優しい技術ではあります。あなたに理解できるかどうか……。」

「そのことなら心配には及ばない。俺はグラウンド・マジックが使える。足りない分は努力が補ってくれるであろう。」「うう。リオは彼がグラウンド・マジックが使えることを心底驚いているようだつたが、何か複雑な表情をしている。

「あなたの子供がグラウンド・マジックですか？普通では無理ですね。普通なら私も信じることはできません。でもあなたは剣に「グローナルの騎士団」の刻印が押してありますね。暗黒騎士団の騎士ならば確かにグラウンド・マジックが使えてもおかしくあつません。あなたを信じますよ。教えてあげますよ。」

「ご協力、感謝する。」

「いいえ、いいですよ。こんなところで立ち話もアレですから、まあ、どうぞ中へおあがりください。悪魔族のちびっこさん。」

「知っていたのか。」

「はい、噂では聞いていました。そうでなければグラウンド・マジックなんていう大技は使えませんから。でも安心してください。私は世間の方たちのようにあなたを差別したりしません。気にせずどうぞ。」

「ならば、お言葉に甘えてお邪魔をさせていただこう。」

そういってナイトは、土壁のボロ宿に入つていった。

第十六話「お泊り」

「お泊り」

外見のボロもとは似ても似つかないくらい、家中はきれいに改装されていた。

中には試験管などの実験道具が棚にきれいに整頓されて並べられている。

研究室の奥のほうの小さな扉をくぐると、「タタミ」と呼ばれるものが床にびっしり敷き詰めてあり、頭上にはなぜか、とてつもなくリアルなカメムシの形をしている電気がある部屋についた。リオはナイトに「ちやぶ台」の周辺に座るようにすすめると、お茶を入れてくるといつて研究室のほうに消えていった。

「質素」というのはこうすることをいつのだらけ。

ちやぶ台以外はほとんど何もない部屋である。

ナイトはその異様な部屋でそんなことを思った。

しばらくしてリオが何やら変な煙の出ている液体をもって戻ってきた。

「ああ～、どうぞ～。お茶です。」

「ありがとう。なるほど、お茶とこりの青緑色をしているのだな。

「そうですね。緑茶です。」

「緑茶か。発酵していないお茶は初めてだ。さつそくいただこう。ナイトはその異様な液体を一口飲んで、話を始めようとしたが、あまりの味に言葉が出なかつた。

それを察してか否かリオが話を始めた。

「さて、では早速この資料をご覧下さい。これはテレパシーを使う上に必要になる氣功の集め方を書いた資料です。手の平に氣を

集中させ、被験者に触れる」と初めて被験者の心を読み取ること
ができるのです。」

「氣功か。それで、どうすれば氣功が使えるようになるんだ???」

「氣功には、陰と陽の2種類の氣が存在します。陽の氣を集める
ためにはこの資料に書いてある体操を太陽の下で行う必要がありま
す。そして陰の氣は深夜に一人で墓場でこの体操を行う必要があ
ります。」

「墓場??何かの間違いではないのか??」

「本當ですよ~。でも嫌なら私は別にいいのですが~・・・。」

「いや、やるつ。」

「そうと決まれば早速やりましょ~う。あ、それと氣を集めるのは
非常に時間がかかります。なのでしばらくあなたはここにお泊り
する必要があるんですね~。もしよければここに住んでしまっても
いいのですが~。」

どさくさにまぎれてリオはまたナイトを「ここに住むように勧誘して
いる。

しかし、ナイトはそれを見破つて返事をした。

「そうか。わかった。住みはしないが泊まりはしょ~。じょりくお
世話になる。」

「そうですか~。残念で~す。わかりました~。」

こうしてナイトの住み込みのトレーニングが始まった。

第十七話「想いのテレパシー」

「想いのテレパシー」

20日の住み込み修行を終えてナイトがグローナル城に戻ってきた。誰かのために何かをしようとする」というのは必ずしも人を成長させてくれるものである。

20日間の修行を終えて帰ってきたナイトの顔はより一層引き締まり、男の顔になっているように思えた。

ゴールドの部屋のドアをノックするとれいなが出迎えてくれた。れいなはナイトの顔を見るなり目を輝かせ抱きついた。

「ただいま。聞いてくれ。俺はテレパシーが使えるようになつた。だからお前はもう無理をして話せるようにならなくてもいい。」

それを聞くと彼女は満面の笑みでナイトに感謝の意を伝えた。ナイトもそれに答えるよつに微笑み返した。

「へえ～！！君、テレパシーなんて大技使えるようになつたんだ～！～すごいじゃ～ん～～愛する女のために頑張つたんだね～。じゃあ僕の心を読ん・・・。」

「では早速俺の部屋に戻つて試してみよう。いくぞ。」

ナイトはゴールドを無視してれいなをつれて部屋を出て行つた。

「なんか最近シカト多くないっすか？？」

ゴールドは一人でむなしくつぶやくとロッドの邪魔をするために電話をかけた。

ナイトの部屋につくと早速一人はテレパシーを始めた。

彼は目を閉じて氣を手のひらに集中させることに集中した。

彼女はそんな彼の様子をじつと見つめていた。

「では、始めるぞ。」

彼女は小さくうなずいた。

彼は彼女の手を静かにとると、意識を集中させた。

すると蚊の泣くような小さな声がナイトの頭の中に響いた。

これがれいなの声なのか、とナイトは感動を覚えた。

よく耳を澄ませてみると確かに言葉が聞こえる。

「これ、ちゃんとナイトに聞こえてるのかな??」

その声にナイトは優しく答えた。

「ああ、ちゃんと聞こえてる。美しい声だな。」

「うわ~、ちゃんと聞こてるんだ~。嬉しい。でも、なんかドキドキするな~。しかもきれいな声つていつてくれた~」

その声を聞いてナイトは思わず笑った。

なんて純粋でカワイイことをいう女なのだろう。

ナイトは、れいなの瞳を見つめた。

れいなも、ナイトの瞳を見つめた。

そのとき、彼は彼女の手を握っていた手を彼女の肩につつすと彼女の唇を奪った。

彼女は彼の意外な行動に驚きながらも嬉しそうにはにかんだ笑みを浮かべた。

第十八話「悲しい過去」

「悲しい過去」

ナイトとれいなはテレパシーの報告の為、ゴールドの部屋へ行つた。ドアをノックするヒゴールドが葉巻をくわえてめざしゃれをついてきた。

「ああ、終わったの？？」苦笑せん。まあ、上がって。」

ゴールドにつけながされ、ナイトとれいなは「ゴールドの部屋に上がった。

ゴールドは早速テレパシーの結果を聞いてきた。

「で、どうなの？？何か聞かせた？？」

「ああ。」

彼の話によるとどうやら彼女の家は父、母、れいなの3人暮らしだつたらしことこう。

しかし、父親が闇金融から莫大な借金をして蒸発。

母親はその見せしめとして彼らに殺されたのだといふ。

彼女の声が出ないのは、母親が殺されるのを目の前で見てしまったためのトラウマせいであつたらしい。

ナイトは彼女から聞き出せたことを正確にすべて話した。

「そうなんだ。どうことは蒸発した父親が唯一の身寄りだっことか～。何か、ホント穢やかじやないね～。で、父親の名前は？」

？

「すぐる
駿だ。清鐘駿。」

「すぐるちゃんね、わかつた～。すぐるちゃんは僕が探しとくね。見つかるまでは引き続き君の部屋におくしかないね。20日も空けたんだから今度はきちんとみるんだよーー！」

ゴールドは葉巻を吸いながら言つた。

「わかった。ではそういう方向でいい。れいなもそれでいいな？」

ナイトは彼女の手に触れるとテレパシーで意見を求めた。

彼女は笑顔でその手をとつて言葉を伝えた。

「うん。またちょっとの間ようしきね、ナイト。名前呼んでくれてありがとう」

ナイトは自分にしか聞こえない彼女の声を聞くと、照れくさそうに彼女にむかって微笑んだあと、顔を戻してゴーラードのほうに向こう直つた。

「了解だそうだ。父親が見つかり次第連絡をくれ。」

「はいはい。なるべく遅く連絡するよ。お別れは寂しいだろうからね。全く、何聞いたか知らないけどラブラブ過ぎて田も当てられないんだから。」

「では失礼する。」

「はいはい。否定しないのね。バイバイ。」

ナイトとれいなは一礼するとゴーラードの部屋を後にして、ゴーラードは彼らを見送った後捜索部隊に連絡を入れた。

「捜索コード0001、名前清鐘駿を直ちに捜索せよ。」

第十九話「さよなら、またいつか・・・」

「さよなら、またいつか・・・」

彼らの努力の成果なのだろうか。
ある日、ナイトがいつものようにテレパシーを始めようとれいなに
近づいた。

彼女も彼の行動に気がついて、自ら近づいていった。
そのときに、彼女は足元にある机につまずいてしまった。

「きやつ。」

彼女は転んでしまったが、ナイトは彼女の発した音を聞き逃さなか
つた。

「お前、今、声を出さなかつたか？？」

彼女もどつも実感があつたらしい。

恐る恐る口を開いてみる。

「ナ、ナイト。わ、私、声が出るよ！…しゃべれるよ！…」

その声を聞いたナイトは、声が出るようになつた本人よりも嬉しそ
うに言つた。

「よかつたな！…これでテレパシーなんか必要なくなつたな。これ
からは直接話せるな。」

「うん！…」

彼女が嬉しそうに答えたと同時にナイトの携帯が鳴つた。
電話の主はゴーレドだった。

「やあ、ナイト。すぐるちゃんの居場所らしきものが見つかつたよ
！…見つかり次第連絡入れるから。そんじゃまたね。」

あれから、何時間がたつただろ？
一向に携帯が鳴る様子はない。

ナイトは小さくため息をついた。

それにつられてか、れいなもため息をついた。

二人とも、電話を待つていてる今の時間はとても複雑な気持ちだった。ナイトは、今まで8ヶ月も続いた「彼女のお守り」という任務から開放される喜びがある。

れいなは、長い間、離れ離れになっていた父親に8ヶ月ぶりに会える期待と嬉しさがある。

しかし、一人に共通するのが、悲しみである。れいなの父親が見つかるということは、同時に、彼らの別れを意味するのだ。

二人の間に今までになかった、気まずい沈黙が流れた。この一秒が、一瞬が、二人で過ごす、最後の時間になるかもしれない。

そうわかってはいるものの、別れにふさわしい、イカシた言葉が見つからないのが現状だ。

二人は黙つて、静かに連絡を待つた。

そのとき、ナイトの携帯のバイブが鳴った。

ナイトは少し躊躇しながらも携帯の受話器をとつた。

「こちらナイト。用件を報告せよ。」

電話の相手は「ゴールド」だった。

「ああ、僕だよ。すぐちやんの居場所がわかつたんだー。褒めて、褒めて 今から部屋にすぐちやん連れてくから。ちやんといなちゃんにさよなら言つんだよ。」

「ああ・・・わかった・・・。」

ナイトは、どこか寂しそうに答えた。

電話を切つてすぐ、彼女の父親らしき人物がやつてきた。

「れいな。迎えに来たよ。今まで一人にしてごめんな。」

「お父さん！」

れいなは嬉しそうに、父親の元へ駆けていった。

父親も愛しそうに彼女を抱くと、ナイトへ向き直った。

「今までこの子の面倒を見てくださって、本当にありがとうございます。」

「これからは、私がきちんと面倒見ていきます。」

「そうか・・・よかつたな。」

彼はどこか冷たく返すと、父親にしがみついている彼女を見つめた。

言いたいことは山ほどあるのに、言葉が出てこない。

そんな彼の様子を察してか、彼女が「サヨナラ」の言葉を発した。

「今までありがとうございました、ナイト。でも、これはバイバイじゃないよ。私は絶対また、ここに来るから。そして、ナイトのお嫁さんになるから!!」

彼女は元気よく宣言すると、彼に微笑みかけ、手を振った。

彼も、その笑顔を見て、微笑を返した。

しかし、やはり、「サヨナラ」の言葉を囁つのは、あまりにひさしがた。

彼は結局何も言えないまま、彼女の無邪気な笑顔をただ、見送つていた。

第一十話「栄光の霸者」

「栄光の霸者」

あれから9年の年月が過ぎた。

あんなに小さかつたナイトも14歳になり、すっかり大人の顔になりました。

昔から、整った顔立ちだけあって、成長した今は、女性の視線を欲しいままにしている。

しかし、強さも、整った顔も、完璧なスタイルも、頭のよさも、女性の視線も手に入れたナイトの目標はただひとつ、最後に残った名声を手に入れることだった。

9年来、一度も王者の座を譲つたことのないゴーラードに変わつて、自分がこの騎士団を率いていくことを夢見ていたのだ。

彼は、ひそかにゴーラードに勝つための特訓をしていた。

前にやつたときは、ほぼボロ負け、いや、結果的には勝つたのだが、負けに限りなく近い勝ちだったので、今度は、ゴーラードの動きなどを研究し尽くした。

その結果、ゴーラードは、技の出、威力コンビネーションなどはとつもなく良いことがわかった。しかし、その一方で、非常に命中率が低いことがわかった。それでやたらと攻撃を出していたわけだ。数撃ちや当たる、ということわざもあるほどである。

これで彼の弱点がわかつた。

ゴーラードは絶対に普通よりも無駄に攻撃を打つてくる。
だから、攻撃ができるだけ避けて隙を作り、そこに強烈な一撃を加えればいい。

ナイトは、準備を万端にし、ゴーラードに声をかけた。

「ゴーラード、俺はお前に決闘を申し込む。俺と勝負しない。」

「ゴーレードは意外に冷静な笑顔で、ナイトの求めに応じた。

「やつか~。もうそろそろ来るこりだろ? とは思つてたよ。わかつた。やろうか。言ひとくけど、僕は手加減が苦手なんだ。本氣でいくからね。」

「臨むところだ。おい、ロッジ。今回も審判お願いできるか??」

「わかつたよ。じゃあスタジアムで待つてるぞ。まつたく・・・お前らは喧嘩が好きな奴らだな~・・・。」

ロッジはため息混じりに返事をすると、スタジアムに向かっていった。

彼らもロッジの後を追つてスタジアムに向かった。

ナイトとゴーレードは互いの位置につき、武器を取つた。

ロッジがあの時と同じように、右手を上げる。

「レディ??」

ロッジの声で、二人は姿勢を低くし、構えた。

「ゴー!!」

その声と同時に、一人は地面を蹴つた。

しかし、若干ゴーレードのほうが早い。

このまま行けば、またしてもゴーレードに先手を許してしまつ。だが、それは阻止された。

二人が地面を蹴つた瞬間、ナイトから凄まじいほど殺気が発せられたのだ。

戦いに慣れているゴーレードでも、これだけ強い殺気は感じたことがなつかたため、思わずひるんでしまつた。

ナイトは思いがけないゴーレードの動きに少々戸惑つたが、その隙を確実についていった。

ナイトはゴーレードの斧をいつも簡単に振り払つと、彼ののどに剣をつきつけた。

あつという間に勝負がついてしまつた。

ロッジも負けたゴーレードも意外な結果に驚いているようだった。

「俺の勝ちだな。団長の座はもういつでも。」

ナイトはそういうて劍を鞘に収めると、やつをヒューマンアーミーを後こうした。

呆然と座つたまま動かないゴールドにロッドが話しかけた。

「おい、一体どうしたんだ！？お前があんな簡単に負けるわけないだろ？？」

その問いに、ゴールドが力なく答えた。

「いや、完全に僕の負けだよ・・・。あの殺氣にはさすがに勝てなかつたな・・・。僕よりアイツのほうが団長にふさわしいよ。」

ゴールドは立ち上がると、スタジアムを去っていった。

ロッドは彼の寂しそうな背中をしばらく見つめていたが、少し距離を開けて、彼の後についていった。

第一十一話「暗黒騎士団の謎」

「暗黒騎士団の謎」

「んで？？今回のターゲットはこのよくわかんない狼たちなの？？これくらいこま退治できないとコニシトの名前に関わるんじゃないの？？」

「ゴーレドは葉巻を吹かしながら面倒くせうに言った。

「まあ、そう言うなよ。現にこっちの仕事も少なくなつてきてるんだ。いいカモじゃないか。」

ロッジはゴーレドに言つて聞かせるように語りかけた。

正直、最近ゴルディアの騎士団が力をつけているせいが、めつきりグローナルの騎士団の仕事がなくなつてきた。来るものとったら、金にならないような小物か、リスク大の大仕事かだけである。早い話、ロッジもゴーレドもそんな仕事にうんざりしていたのである。

「やう・・・。じゃあ、この仕事、受けるの？？金になるようには見えないけど。んん！？」

そう言いつつ賞金のところに手をやつた彼はその金額に唖然とした。「10万ドル！？」んなちつこじ狼、退治するだけで！？ありえないよーーー！」

「やう。それが今回の疑問点だ。」

そう言つてロッジは小さくため息をついた。

「普通の狼の群れなら、コニシトの騎士団なら、容易に退治することができるはずだ。つまり、今回のこつらは普通じゃないってことだ。」

ロッジはゴーレドと手を合わせると続けた。

「大仕事になるわ。」

「了解」金になる仕事なら任せてよ……」「

彼らは「交渉成立」と言わんばかりに握手をすると、武器の準備をはじめた。

コニシット郊外ウォンサッギ・・・

新鮮な魚介類が有名な、主に陽気な農民や漁師が住む村だ。普段なら市場などをやっていて、活気に満ち溢れているはずである。しかし、村は静まりかえつていて閑散としている。

「なんか、さみし~村だね・・・。」

「仕方ないさ。暨、あの化け物におびえてるんだ。早いとこじつにかしないとな・・・。」

「まあ、とりあえず村長に話を聞いてみようか。それでいいかな? ? 団長さん。」「

「ゴールドは皮肉混じりにナイトに承認を求めた。

「・・・・・・・・・。」

ナイトは無言で首を縦に振った。

「あ~あ、君って奴は。またそれだよ。君には口がないの~? ? ?

「・・・・・・・。」

「無視かよ~。ホント、好きだよね~。」

そういううどゴールドはナイトの肩に手を回した。しかし、その目は笑っていない。

ナイトはゴールドをにらみつけた。

ゴールドも負けじとナイトをにらみつけた。

二人の間に重い空気が流れた。

まずい。このまま行くと二人の暴動が起きかねない。それを察したロッドがその雰囲気を断ち切った。

「まあまあ。とりあえず行き先が決まつたんだからいいだろ? ? 仲間同士でやりあうなんてゴメンだからな。さあ、行くぞ。」「はいはい。パパの言うことは聞かないとな。」

「俺はお前みたいなヘンタイを子供に持つた覚えはない。」「

「ヘンタイ～！？ヘンタイって・・・」

「ほら、早く行くぞ。」

「・・・・・・。」

「で、探したはいいけど・・・」

ゴールドは疲れきった表情で呟いた。

「どれが村長の家か分かんないじゃんかよ～！～！」

ゴールドが叫びたくなるのも無理はない。

家の形や色、素材がすべて全く同じである。

辛抱強い彼らも、さすがに途方に暮れてきた。

「あなたたちはもしや・・・、暗黒騎士団の者たちか？？」

そのとき、後ろから聞こえた声に一同がいっせいに振り返った。

そこには背の低い頭に白髪が混じった老人が立っていた。

「あなたが村長さん？？」

ゴールドの問いに彼は首を縦に振つて答えた。

彼こそが探していた村長なのだ。

しかし、ロッジは喜びと同時に彼の先ほどの発言に疑問を持った。

「暗黒騎士団？？それはどういうことですか？？」

「ああ・・・。実は君たちにはいい噂がなくてね。任務のためなら犯罪にでも手を染めると聞いている。せっかく来てくれたのに、すまないな。」

「いえ、もう言われなれているので。それより、この魔物についてお話を聞かせていただけませんか？？」

「わかった。期待しているぞ。」

どうやら化け物は夜行性らしい。

村長からの話を聞いて、彼らも本格的に準備に入った。

第一十一話「孤児の騎士」

「孤児の騎士」

騎士団一行は、夜、民家の後ろに身を隠し、ターゲットを待つた。不可解な狼たちの行動を確認するためだ。

狼は普通肉食である。

だから彼らが人里に降りてくる理由として考えられるのは、食料となる草食動物が不足しているからであろうということくらいである。しかし、彼らは人を襲いに来るのだが、人を食べよつとしていた形跡がない。

つまり、何か別の目的で彼らは村を襲いに来ているということである。

何があるにしろ、このまま彼らを放つておくのは危険である。彼らが行動を始め次第、騎士たちは奇襲をかけようと思っていた。しかし、そのときはナイトの声とともに、足早に訪れた。

「ターゲット確認。前後左右に円形に配置。」

「ちつ。くそつ。囮まれたか・・・。」

ロッドは自分の不注意を疎み、悔しそうに舌打ちをした。

「なになに？？こんなたくさんいたんだ。いつの間に？？」

ゴールドは雰囲気に合わないのんきな言葉でつぶやいた。

四方八方の狂気に満ちた赤い目が、騎士たちをにらみつけている。騎士たちは思わず目を見開いた。

しかし、その中で一人だけ冷静さを失わないものがいた。団長であるナイトだ。

ナイトは剣を抜くと、全員に冷たい声で命令を下した。

「攻撃用意。戦闘開始。」

その声で目が覚めたのか、騎士たちは剣を抜き、一斉に狼の群れに

つっこんでいった。

しかし、彼らの田の前で信じられないことが起こった。

剣を持っている彼らの手が、重い岩でも乗せられているかのように元気にとってもなく重くなったのだ。

彼らはその重さに耐えられず、思わず剣を取り落としてしまった。

「ど、どうなってるんだ！？」「こんなの聞いてないぞ！？」

ロッドがはき捨てるように聞いた質問に、ゴーレドが答えた。

「あいつら、魔法を使つてる・・・。グラウンド・マジックだ！！」「ばかな！あんな動物にそんな難解な大技使えるわけがない！！」

ロッドは大声で否定しながら、ゴーレドが頭がおかしくなったのかと本気で心配した。

そうでなければそんなありえないことを言ひはずがない。

しかし、ゴーレドはいたつて冷静だった。

「いや、今のは間違いないぐラウンド・マジックだよ。重力を、ある一定の部分だけ通常の数倍にしたんだ。そうすれば、みんな重くて剣なんて持つてられないからね。僕もよく使つ手だから、間違いない。」

ロッドだけではない。ナイト意外の全員が、その言葉に啞然とした。そんな奇妙な技を使つてくる軍団に、この人数ではとても勝てるはずがないからだ。

ロッドは相手の攻撃をかわしながらゴーレドに言つた。

「（こ）は一旦体制を立て直そつ……（こ）の数はとても相手にできない。このままでは全滅してしまつ。」

すると、ゴーレドは残念そうに言つた。

「それは無理だね。この田陣に下手に突っ込んでいたらそれこそ全滅だ。」

「じゃあどうするんだよ！？」

そのロッドの言葉が終わるか終わらないかくらいに、突然、5匹ほど狼が倒れた。

「簡単だ。ぶつた切ればいい。」

ロッドの間に、闇の中から、重苦しい声が答えた。

「あなたは・・・。」

ロッドは、見覚えのある顔に心底驚いていた。

「よお〜、ロッドか。俺の管轄で何遊んでんだ??」ここからは俺たちの獲物のはずだ。邪魔すんな。」

「ロドリゴ!!お前も来てたのか。ちょうどよかつた、ここからは・・・」

「どけつつてんだよ!! 邪魔だ、ザム共が!!」

そう言つてロッドの言葉をさえぎると、ロッドを突き飛ばし、ロドリゴたちは敵陣に突っ込んでいった。

しかし、やはり彼らも狼たちの魔法には、太刀打ちできない様子だった。

すると、ナイトが一言つぶやいた。

「加勢、開始。」

第一二三話「暗闇の戦い」

「暗闇の戦い」

そのナイトの声と同時に、騎士たちが目を覚ましたかのように狼たちの群れの中にもう一度突っ込んでいった。

しかし、騎士たちは、今度は一人一人各自で戦つ氣はさらさら無いようだ。

剣術に長けたものが前に出て、魔術に長けたものが後ろで魔術を放つ絶好のときを待つ。

つまり、前衛組みは言わば「おどり」で、魔術師たちが「本体」になる、前衛・後衛型の戦い方に変更したのだ。

しかし、ロドリゴはナイトのその判断に納得いかず、ナイトの胸ぐらをつかんで、大声でナイトに怒鳴りつけた。

「なぜ俺たちの邪魔をする？？お前らは引っ込んでろ！！！」

するとナイトはその手を静かに払うと、冷たい声で言い放った。

「邪魔ではなく、加勢だ。現にあなたたちの今の実力ではこの狼たちに勝てる確率は0・0000001%だ。この数値はほぼ0に等しい。つまり、我々の加勢なしであなたたちが彼らに勝つことはできない。」

ナイトの言葉に、ロドリゴは余計に腹が立つたらしく、

「うるせえ！－てめえなんかに助けてくれなんて頼んだ覚えはねえ！！勝率は・・・0・0001だかなんだか知らないが、あることにはあるんだ－－」
「いつら下がらせろ－！」

「その要請は承認できない。また、勝率は0・0000001%だ。」

ロドリゴの言葉にナイトは丁寧に言い返した。

「知るかそんな数字！！もし下がらせないんだつたらお前ら・・・ロドリゴがナイトにインネンをつけようとしたとき、急にナイトが

すばやく剣を抜き、ロドリゴに切りかかった。

なんとかギリギリのところでかわしたものの、もし当たれば大怪我
どころではすまない。

「あつぶねえな！－バカヤロー－－てめえやるならフュアにやれよ
！－」

ロドリゴの言葉を無視すると、ナイトはロドリゴに背を向けて、狼たちの群れのほうへ歩いていってしまった。

彼を追いかけようとしたロドリゴの背後でドサッという妙な音が聞こえた。

振り返つてみると、狼が5、6体、ばっさり真っ二つに切られて倒れていた。

狼たちに囲まれたゴーレードたちだが、ロドリゴ一行の加勢により、優勢を保っていた。

お互に助け、助けられの一入三脚で狼たちを倒し、あと一息とうところまで狼たちを追い詰めた。

また、ゴーレードには得策があるらしく、そこまで狼たちを追ったのにも関わらず、一旦距離を置いて、あえて彼らに攻撃するチャンスを与えた。

案の定、狼たちはゴーレードに向かつてグラウンド・マジックで作った、空気の針を放ってきた。
するとゴーレードは、待つてましたと言わんばかりに、グラウンド・マジックをお返ししてやつた。

ゴーレードは空気の濃度を調節して、厚く、弾力性のある空気の壁を作り、空気の針を彼らに向かつて跳ね返して、彼らを一掃した。
騎士たちはロドリゴの意向とは裏腹に、グローナルとユニットで協力して、狼たちを殲滅した。

最後の一匹が倒れたとき、ナイトが一声かけた。

「ターゲット、デリート完了。戦闘終了。」

その声を聞いて、騎士たちからは歓声が上がったが、ひとりだけ今

の戦いに納得がいかないものがいた。

コニッシュの騎士団の団長ロドリゴだ。

ロドリゴはロッジとナイトの前に立つと、先ほどのもつと大きな声で抗議をした。

「なぜ、なぜ俺が止めても邪魔をした?? 俺たちで十分だとあれほど言つただろ??」

「何度も同じことを繰り返すのは好きではない。あのままだとあなたたちが全滅する恐れがあったからだ。」

ナイトの冷たい返事にロドリゴは逆上して怒鳴りつけた。

「えらうなこと言つな……さつきの戦いだつて貴様らは俺たちの足手まといだつただるうが……」

「むしろ足手まとはあなたたちだつたよひに感じるが……?」

「てめえ・・・!」

ロドリゴが剣を抜いて、ナイトに切りかからうとしたところで、慌ててロッジが止めに入った。

「まあまあ、でも結果的に助かったんだからそれでいいじゃないか。こゝで争つてもどちらの得にもならないだろ?? それよりも早く長老に報告してこひつ。」

「ちつ・・・。」

ロドリゴは舌打ちをしたが、しぶしぶロッジの言葉に従つた。

ナイトも、彼の様子を見て、剣を納めると騎士たちの群れについていった。

第一十四話「血縁関係」

「血縁関係」

「そうか。あの狼たちを撃破したか。それはご苦労だつたな。」

村長は騎士たち一人一人にお茶をだし、静かに言った。

「そうだよ～ 僕たち強いでしょ？？ 壊めて壊めて」

「しかし、これができたのは俺たちだけの力じゃないんです。ロドリゴたちが協力してくれたから・・・。」

ゴールドの傲慢な態度に逆上して、またロドリゴが怒り出す前に、ロッジドがロドリゴを見ながら、すかさず口を挟んだ。

するとロドリゴは不服そうに村長に言い訳した。

「違う！！！ こいつらが勝手に俺たちの獲物に手を出してたんだ！！！」

「ロドリゴ」

村長は興奮するロドリゴを落ち着かせようと、優しく語りかけた。

「別にわしは彼らにも、お前にも怒つてはいない。むしろ感謝しているのだ。よく、彼らと協力して戦闘ができたな。偉かつたぞ。」

「俺は協力した覚えはねえな。危うくあのクソガキに」

といつてナイトを指差し、続けた。

「殺されかけたんだ。とても協力してるって感じじゃなかつたな。」

村長の言葉に内心嬉しい気持ちでいっぱいだったロドリゴだが、ここで手放しで喜んでは騎士の名がする。

ロドリゴは、嬉しい思いを隠して、わざとひねくれたセリフを返した。

「なに、どつこじけりお互いに助かつたのは事実だ。彼らには礼を言わんとな。」

そういうつて村長は、グローナルの騎士たちに頭を下げた。

するところナイトは待ちくたびれたのか、用件を切り出した。

「ところで、村長。報酬はまだか？？」

「おお、そうだな。これが約束の10万ドルだ。」

そういうつて村長は大きなトランクの中から札束を取り出し、ナイトに渡した。

それをみたロドリゴは、どうも納得いかない様子で噛み付いてきた。

「ちょっと待てよ。何でてめえが全額もらつてんだよ？？」

「そういう契約だからだ。」

ナイトはさも当然のことながらと答えた。

「そんなのありかよ！？俺たちだつて戦つただろうが！！」

「勝手にお前たちが加わつてきただけだ。」

「ふざけんな！！」

このままではまた喧嘩だ。

しかし、村長はそのことでも提案があるじしべ、片手を挙げて、ロドリゴを黙らせた。

「ロドリゴ。誰がお前たちに報酬をやらんと言つたんだ？？お前のぶんもちやんと用意してある。祖父といつのは、孫には何でもやりたいものだ。」

しかし、ロドリゴはその言葉に惑いがあるようで、ナイトに話す時は別人のような小さこ声で言つた。

「で、でもよお・・・恩人から金を取るつて言つのは何か・・・ちょっと違うような気がするんだが・・・。」

村長は、そのロドリゴの心中を察していたのか、優しく、包み込むような声で言つた。

「だがお前たちも戦つたのだ。報酬をもらう権利がある。これは決して巻き上げるのとは違つ。仕事をしただけの「報酬」だ。そうだろ？？」

黙つて動こうとしたロドリゴに、村長はながば強引に札束を渡した。

「これはお前へのプレゼントだと思つて受け取れ。」

しかし、彼が本当に気になっていたのは、そのことではなかつた。
「これはありがたくもらおう。でも、でも、俺は本当にあんたを「じいせん」って呼んでもいいのか??だって、俺はあんたのホントの孫じや・・・」

ロドリゴは、小さいときに戦争で、グローナルの騎士に両親を殺された孤児だつた。

身寄りのないロドリゴを孤児院から救い出し、わが子のように育ってくれた村長には、感謝しても、しきくせなにほどの恩とこうものがある。

しかし、それでも「じいせん」と呼ぶのには、やはり、少なからず抵抗があつた。

しかし、村長はロドリゴのその思いを断ち切るよひに、情けない言葉を聞かないよひに、ロドリゴの言葉を途中で切つて、元気よく宣言した。

「わしと血がつながつてようがなかろうが、今更それは関係のことだ。別にお前がそななりたくて、なつたわけじゃないのだから、引きめを感じることは全く無い。わしのことは、本当の祖父だと思つていい。」

村長はそつこつと、自分よりも遙かに背の高い、ロドリゴの頭をなでた。

ロドリゴは、今まで感じたことの無かつた愛を感じ、じつじつと笑つた。

グローナルの騎士たちは、その暖かい笑顔に見送られながら、ウオンサッギを後にした。

第一一十五話「思惑」

「思惑」

研究者の町ジスニア・・・

ここでは有能な研究者たちが、日夜研究に精を入れる場所である。ここに騎士団に、グローナルに居る国王から一通の手紙が届いた。その手紙には、ジスニアの騎士団に対する批判がびつしりと書き込まれていた。

その手紙から見て取れるように、国王は相当腹を立てているようだつた。

その手紙を読んだ、この騎士団の団長と思しき人物がぽつりとため息混じりにつぶやいた。

「国王陛下・・・。言いたい放題ですね。我々を役立たずと言い切りますか。」

「ウイレム様・・・。私は、そのような言葉はお気になさらなくてもよろしいかと思います。ウイレム様は十分頑張つておられますよ。」

一人の部下がウイレムを慰めようと言葉をかけたが、余計逆上させてしまつたようだ。

「それでも国王陛下の役に立つていなければ、何もしていいのと同じですよ。それもこれも、あの「ゴールド・スター」が私の場所を奪つたせいです。あとあの榎騎士とかいう悪魔が国王を洗脳しているせいだ。許せませんね。でも・・・」

そういうつてウイレムはまた、深いため息をついた。

「結局、彼らのほうが仕事ができているということですかね。これだけ離れていれば、あちらの様子を知ることでさえも困難ですから。それにしても困りましたね・・・。」

「何にお困りのですか？」
部下がすかさず質問する。

その質問にウイレムが静かに答えた。

「このままではあの『ゴーレド・スター』や神騎士に国王の信用までもとられてしまします。」つながら奥の手ですね。」

そういうとウイレムは静かに笑った。

「とつておきのスパイを用意しましょう。とつておきのね。危険の田は早めに摘んでおくべきなのです。」

そういうとウイレムは一人の女性を呼んだ。

三日後・・・

グローナルの騎士団のロッードのもとへ一通の手紙が届いた。
珍しきジスニアの騎士団からである。

ロッードは不審に思いながらもその封を開けた。

その手紙の内容は、一人の研修生を送るから面倒をみてくれ、とい
うものであった。

ジスニアからの手紙にしては、えらいく普通の内容である。
ロッードはますます首をかしげた。

するとその様子をみたゴーレドが、風のよくな速さでやつてきた。
「何々？？何見てんの？？ラブレター？？モテモテじゃん！-！僕に
も見せてよ～」

「違う！！勝手に妄想するな、変態。ジスニアの騎士団から使者を
送るつて書いてあるんだ。でもどうも怪しいな。何かあるんじゃな
いかつて思うんだが・・・。」

ロッードはゴーレドに丁重なつつこみを入れた後、勘のいい彼に聞い
た。

ゴーレドはその内容を聞いて少し考え込むよつた仕草を見せたが、
すぐに答えた。

「君はホントに心配性だね。きっとその心配は杞憂になると想つよ。

あのベンタイだつてたまにはまともなこと考へるつゝじや。それより、いつ来るの？？その使者つて。

「一ヶ月後だけど・・・。」

「そんじゃ、たまつてゐ仕事片付いたら準備しなきやね。」

「ああ・・・。」

ロッドは、珍しくあつさりとジスニアを信用したゴールドの態度に

疑問を感じながらも、そのときは彼に合わせた。

第一十六話「悲しき死神」

「悲しき死神」

ユニット郊外ウォンサッギ・・・

この街には狼退治に来たことがまだ記憶に新しい。

以前来たときはうつてかわって、街中が活気付いて、穏やかな午後に戻りつつあった。

しかし、以前来たときと変わったのはそれだけではない。

「暗黒騎士団」と呼ばれていたグローナルの騎士たちは「英雄」と祭り上げられるようになつたのだ。

今日も彼らが訪れると、街の住人は目を輝かせて大歓迎してくれた。「おう！あんたたちか。見ろよ！！この復興、ふり！！見ちがえただろ？？これもあんたたちのおかげだぜ。」

騎士たちが通るたびに歓声が起きるほど、この街では彼らは特別な存在だった。

それは街の住人だけではない。

この街の村長も同じだった。

ちょうど街なかで彼らが村長と遭遇したとき、村長は嬉しそうに話しかけてきた。

「お前たち、來ていたのか。報告でもしてくれれば存分にもてなしやつたというのに・・・でも、お前たちの出番は今のところなさそうだぞ？？見てみろ！！あの日以来あの狼たちは来ないし、そのほかの目立つた事件もない。平和そのものだ。ところで今日は何の用だ？？視察か何かか？？」

しかし騎士たちは、村長の表情とは似ても似つかない表情で黙つたままつづむくばかりで何も話そとしない。

「ここにいる住民に殲滅令が出たからだ。」

彼らの気持ちを察してか、ただ単にＫＹなのがは謎だが、何も話そ
うしない彼らにかわってナイトが冷たく言い放つた。

その言葉に、村長を含めた街の住人は耳を疑つた。

「そ、そんな、馬鹿な・・・。わしらが国に何をしたというのだ！
！わしらはただ・・・ただ、自分の生活を営んでいただけだ！！」
彼の言葉の意味をわかっているのかわからないが、それでもナイト
は冷たく続けた。

「あなたたちの事情がどうであれ、これは国の命令だ。我々が逆ら
うこととはできない。あなたたちもだ。命令が下された以上、我々は
その命令に従うだけだ。」

彼のその言葉はグローナルの騎士たちに向けられているようでもあ
つた。

そういう終わるとナイトはゆっくりと剣を抜いた。

その仕草をみた村長は慌てて抗議した。

「ちょっと待て、ナイト。いくら命令と言つても従つべきものとす
うでないものがあるだろ？？？」
「この場合はお前に従つてはどうだうな
のだ？？」

「従わざるべき命令など、この世に存在しない。」

彼はさも当然のように言った。

彼の言葉を聞いて、村長は彼らの行動を悟つた。

村長は住人のほうを向くと大声で叫んだ。

「皆のもの！逃げるのだ！！生き延びるのだ！！」

「無駄なことを。」

ナイトはそうつぶやくと、すばやく動きで逃げ惑つ住民を次々と切
り捨てていった。

ナイトの行動を見て、それまでつづむいていた騎士たちも、不本意
ながら殲滅を開始し始めた。

女子供関係なしに騎士たちの剣は次々と住人たちの体を引き裂いて
いった。

村長はナイトの剣を受け止め、応戦しようとしたが、彼の剣圧で吹

き飛ばされた。

倒れた村長ののど下にナイトは剣を突きつけた。

「覚悟しろ。」

彼の冷たい言葉に自分自身の命の終わりを感じた村長はゆっくり目を閉じると、ナイトに最高の恨みを込めて、一言つぶやいた。

「やっぱりお前たちは暗黒騎士団だな。」

彼の遺言を聞いた後、ナイトは勢いよく剣を振り下ろした。

「任務、完了。」

西に傾ききつた太陽が、ウォンサッギの街を赤く染めていた。

第一一十七話「強者どものマーチ」

「強者どものマーチ」

ウォンサツギの殲滅令から2週間の月日が経過した。まだ2週間、というものもいるが、彼らにウォンサツギの悲劇を嘆いている時間はない。

次はジスニア郊外の小さな町、カールスルーエの視察にいかなければならないのだ。

しかし、今回はまだ視察なので、ゆっくりできるとこえべできるのである。

そう思つてか、ゴーレドが意氣揚々と叫んだ。

「前回の任務は最悪だつたけど今回のは楽だね！－！きっとすぐ終わるよ。そしたら、本格的に新人さん迎える準備しなきやね、ロッド

－

彼のノーテンキな発言とは裏腹に、ロッドは気難しい表情で答えた。「しかし、カールスルーエではここ最近、悪魔族が団体で街を徘徊しているというよくない噂を聞いている。しかも彼らの戦闘の技術はそういうなものらしい。きっとB種なんだろうな。気を抜くと一撃でやられちまうぞ。」

「ダーディヨーブ、ダイジヨーブ　いざとなつたらこの僕が愛しのロッド姫のために一肌ぬいであげるから　－

「・・・・・　いらない。」

ゴールドの熱烈な愛の告白を受け、ロッドは鳥肌が立つのを感じた。

「姫」づけである。

この上なくキモイ。

ゴールドをかけるよつこ、ロッドは準備室へと逃げ込んだ。

2日後・・・

グローナルの騎士団の姿はジスニア郊外の町カールスルーエにあつた。

農村地帯が当たり一面に広がるのどかな町だ。

のどかな視察日和の町をみてゴーレドは憂鬱そつそつぶやいた。

「何これ。どこ見渡しても田畠ばっかじゃん！－ショッピングは？ナンパは？？」

「お前そんなもののために、自分の任務じゃないのにこの視察に付いてきたのか・・・。」

ロッドは呆れ顔でゴーレドを見た。

「当たり前じゃん！－！そりゃなかつたらこんなクソつまんない視察に誰がついてくるんだよ！－もー最悪。」

ゴーレドは口をとがらせてスタスタと早足で歩き出した。他の騎士たちもそのあとを追うように早足で歩いた。

すると突然ゴーレドが足を止めたため、ロッドはゴーレドの背中に顔をぶつけた。

「いつてえな！－急に止まるなよ！－！」

「あれ・・・なんだ・・・？？」

「はあ！？そんなこといつて誤魔化すなよ。今のは絶対・・・」
それまで怒りに任せてゴーレドに怒鳴っていたロッドだったが、彼の見ている方向をみて、その感情は一気に冷めていった。

「何だ、あれ・・・？？火事か？？」

「いや、違う。何かが、違う。」

ゴーレドの言葉が終わるかおわらないかくらいにナイトの冷たい声が響いた。

「殺氣確認。攻撃抑制機能、一時解除。抹殺、開始。」

ナイトがそういった瞬間、突然、黒い影があたりをつつみ、彼らに襲いかかつた。

何とか間一髪のところでかわしたものの、たった一発の攻撃で、地面が地割れを起こしている。

「これをまともにくらつたら、生きて帰れる保障はない。

「魔術師！？それとも悪魔族！？どっちにしろこのままじややられちやうよ…！」

「冗談じゃない。お前俺を守るんじゃなかつたのか？？」

「そんなこといつてる場合じやないよ…！」

ゴーレードは彼らの危険さをその殺氣から十分すぎるほど感じ取っていた。

彼らは強い。

もしかしたら全滅する恐れだつてある。
どうにかして逃げなければ。

するとそのとき、ナイトがつぶやいた。

「俺にまかせろ。お前たちは隙をついて逃げる。いいな？？」

「でも…」

何か言おうとしたゴーレードを無視し、ナイトは敵陣へ突っ込んでいった。

「あいつに従おひ。」のままでばのみち全員死ぬ。
ロッジの言葉に、ゴーレードは静かにうなづいた。

本当にひとりで大丈夫なのかといつ騎士たちの心配を裏切るよつて、
ナイトは次々に敵を切り伏せていく。

あつという間に二、三人まで追い詰めた。

そこまで追い詰められた彼らが、今までかぶつていたロープを脱ぎ捨てた。

目が赤色をしている。

「やはり悪魔族か。」

ナイトは小さくつぶやいた。

「さすが我らが同胞。すさまじき強さだな。だが、なぜ我ら同胞を攻撃する？？我らは仲間ではないか。なぜ人間に加担している？？」

「命令だからだ。国王の命令は絶対だ。」

彼らの問いに、ナイトは短く答えた。

冷たいが、強い意志のこもった他の意見を一切受け付けないといつた返事に、彼らはがっかりだ、といった様子でつぶやいた。

「そうか。それは残念だ。お前だけでも助けてやるつと思つたのに。

「その必要は無い。今から死ぬのはお前たちなのだから。」

そういうつてナイトは彼らに切りかかった。

「愚かな。」

彼らは突つ込んできたナイトに向かつて手をがぞした。だが、何かをしようとする前に、切られて息絶えた。

「あと一人。」

ナイトはそういうつてボスらしき人物に剣先をむけた。

第一一十八話「墮天使」

「墮天使」

ナイトは大きく息をすつて、彼らに突っ込んでいった。

彼らは一手に分かれて、ナイトの意識を拡散させようとしたが、ナイトは最初から狙っていた手下を切り伏せた。

ボスはきっと強いはず。

手下を先に倒してから戦ったほうが、手助けをするやつがない分、いくらか戦いやすくなる。

最初からそれを狙つての行動だった。

ボスはさすがに味方を全員やられて怒り狂っているのかと思ひきや、意外にも冷静にその様子を眺めていた。

「本当にお前はめちゃくちゃだな。」

ボスのそんな言葉を無視し、ナイトはボスに切りかかつた。

しかし、彼はガードする様子も、攻撃を避けようとする様子も無い。

ただ、笑つてナイトの行動を見つめているだけだった。

彼の意外な行動に少々驚いたものの、ナイトは的確に彼の肩を切りつけた。

すると、とんでもないことが起こつた。

なんと、攻撃を受けたボスではなく、攻撃をしたナイトが肩に傷を負うことになつた。

ナイトは肩をおさえて一旦ボスと距離をとつた。

その結果に心底驚いて、混乱しているようだった。

しかし、ナイトが大怪我を負つている絶好のチャンスだというのに、ボスは攻撃してくる様子が無い。

ただ笑つてナイトを見つめるばかりだった。

その様子をみて、ゴーレドがナイトに叫んだ。

「ナイト！－そいつ、ボディ・スリップっていう魔法を使つてる－

！攻撃を受ける対象が変わる魔法だ！！」

それを聞いて、ナイトは冷静を取り戻したようだった。

対処法はイマイチわからないが、攻撃を受ける対象が変わる魔法なら、こちから攻撃を仕掛けなければいいだけのことだ。

どうやら自分の置かれている状況がわかつたらしいナイトに、おもしろくない、といった様子でボスがようやく剣を抜いた。

「どうやら俺も本気を出さなきゃいけないみたいだな。同胞といつても、人間に加担している裏切り者に手加減はしないぞ。覚悟しろよ。」

そういうつてボスは目にも留まらぬ猛スピードでナイトに突っ込んで、凄まじい速さでコンボを繰り出した。

その速さに、さすがのナイトもギリギリのところによけるのがやつとだった。

深い傷のせいか、いつになく息まで切らしている。

この様子だと、あまり長い時間の戦いには耐えられないだろう。

その様子を見たボスはにやりと笑つたあと、もう一度ナイトに突きを繰り出し、ナイトがそれをかわした隙をついて、彼の腹に一発協力なボディブローを浴びせた。

ナイトは傷の痛みと殴られた痛みに耐えかねてその場にしゃがみこんだ。

ボスはとどめをさすため、剣を大きく振り上げた。反撃しようにも、痛みで体がいうことをきかない。

ナイトは覚悟を決めた。

ボスの剣が振り下ろされた瞬間、ナイトの剣がボスののどを突いた。激しい戦いのまくがこれで降りたかのように思えた。

皆は安心して、仰向けに倒れているナイトのもとに向かった。

しかし、彼らを待ち受けていたのは衝撃的な映像だった。

今まで、絶対的な強さをほこったグローナル騎士団の団長が、右目から大量の血を流して倒れている。

「ナイト！－ナイト、ナイト！」

騎士たちは激しく動搖し、何度も彼の名を呼んだ。しかし、彼は指先を動かすのがやつとらしく、動かない手をムリヤリ動かして「生存」を伝えた。

この状態では、治療を急ぐ必要があるようだ。

彼らは急いで応急処置をし、グローナル城へ引き返した。

処置室から出てきたドクターに「ホールド、ロッドの一人が駆けよった。

「どうなんだ？？ナイトの具合は？？」

「はい。何とか一命は取り留めましたよ。今は個室で休ませてあります。皆様的確な応急処置のおかげですね。しかし・・・」

そういうとドクターは表情を曇らせた。

「ナイトさんの右目は損傷は予想以上に激しくてですね・・・。治療のしようがありませんでした・・・。」

「どうじうこと？？まさか・・・」

「ホールドは自分の予想が外れるようだと願った。

しかし、その予想はみごとに的中してしまった。

「・・・ナイトさんの右目は摘出させていただきました。彼の右目はもうありません・・・。つまり・・・」

「もう見えないということか・・・。」

言いづらそうなドクターに代わって、ロッドがドクターの言葉を代弁した。

「そんな！－それじゃあナイトの復帰はどうなるの？？」

ドクターはうつむいて、小さく低い声で答えた。

「難しいでしょうね・・・。」

三人の間に氣まずい沈黙が流れた。

「・・・申し訳ありません。私が力不足だつたばかりに・・・。」

「ドクターのせいじゃない。それに、まだ復帰できないと決まったわけじゃない。」

「でも绝望的だよ・・・」

彼らは、騎士団とナイトの未来を考えると、とても希望をもてなくなってしまった。

そのころ研究者の町ジスニアでは一人の女性がジスニアを後にして、東へ向かっていった。

第一十九話「10年の時を超える・・・」

「10年の時を超える・・・

・
」

ナイトはぼやけた意識の中で、左目には真っ白な天井を、右目には真っ黒な天井を見た。

だが、いくら目を動かしても左目には真っ白な、右目には真っ黒な風景しか見えない。

まだ自分は夢の中にいるのかと疑つてしまつほど、単調な風景しか見えない。

しかし、麻酔の切れた右目の痛みで今、自分の意識ははつきりしているといつことがわかる。

なぜ、物体が物体が見えないのだろうか？？

そして、なぜ左右で違う風景が見えるのだろうか？？

自分はどこにいるのだろうか？？

どのくらいの時間この単調な風景を見続けるのだろうか？？

さまざま疑問が一気に彼の脳を埋め尽くした。

だが考えたところでわかるはずもない。

ナイトはとりあえず自分の寝ているベットと思われるものから体を起こすと、あたりを手当たり次第触つてみた。

だが触つたところでそれが何であるかなどわかるはずがない。

彼は短くため息をついた。

そのとき、やや右側から甲高い声が聞こえた。

「あ、目覚めたんだ！！よかつた！！」

彼は瞬時に声のした方へ向き、戦闘態勢をとった。

「何者だ？？」

彼の冷静な声に彼女は短く笑つて答えた。

「あははっ。そんなに怖がらなくとも大丈夫だよ。私は清鐘麗那。あなたのメイドとしてジスニアから派遣してきたの。実はあなたとはすぐ昔に一度会ってるんだけどね。あ、でもあなたは大活躍したからそんなこといちいち覚えてられないか。」

清鐘麗那・・・。

どこかで聞いたことのあるような名である。

いや、むしろ忘れるはずの無い名である。

10年前のジスニアの街で、声が出ないせいでマフィアにからまれているところを救い、ともに共通の楽しい日々をすごした彼女の名である。

彼は表情を変えずにその声の主を見た。

しかし、真っ白な風景と真っ黒な風景以外何も見えない・・・。

「ここはどこだ??」

彼は清鐘麗那と名乗るその女性に冷たくたずねた。

「ああ、そつか・・・。包帯で見えないんだね。ここはあなたの部屋だよ。今あなたが寝てたのがあなたのベット。あなたはジスニア郊外の町カールスルーエの魔族と戦つて右目を負傷したのよ。」

彼女の最後の言葉が、彼の胸にひつかかつた。

「右目を負傷。それは、つまり右目がないということか??」

彼は表情も口調も変えずに聞いたが、内心そうではないことを祈った。だが、彼女からの返答は残酷なものだった。

「そうか。ということは、もう騎士への復帰は絶望的であるということだな。」

彼は冷たくつぶやいた。

彼女は彼の弱気なその発言が気に入らなかつたのか、急に表情を変えて喋りだした。

「何言ってんの!? あんたはこれからその騎士団に戻る為にリハビリするんでしうが!! あんたがそんな弱気なこといつてたらあたしがあんたを支援する意味ないでしうが!!」

感情的な彼女とは対照的に彼は近くにあつたベッドに座ると冷静に

言った。

「では聞くがお前が入団者審査員だつたとして、片目のない者を採用するか??俺だつたら絶対に採用しない。足手まといになるだけだからな。俺が努力したところで騎士団に戻れる保障はどこにもない。」

彼の発言にとうとう彼女はキレてしまった。

「あんたねえ・・・やつてみもしないで勝手に決めつけないでよ！！！」

彼女は息継ぎをして続けた。

「あんたは今まで数々の伝説を残してきた男でしょう！？その体では「無理」と言われたのに大人でも扱いの難しいロングソードを5歳で使いこなし、絶対に「無理」と馬鹿にされながらも5歳で入団試験に受かつて大人たちのどぎまをぬいて、「無謀」といわれながらも14歳で団長の座を「ゴーレム」から奪いとつた最強の騎士じゃない！！そんなやつがこんなところで足踏みしてていいの！？あなたはこれからいくらでも大きくなれる可能性があるのに、こんなことでその可能性を捨てていいいの！？百戦錬磨の騎士が怪我なんかに「負けて」いいの！？」

彼女の言葉をナイトは黙つて聞いていたが、不意にベッドから立ち上がると静かに彼女につぶやいた。

「そこまで言われてはやらないわけにはいかないな。俺もやるだけやってみよう。」

彼女の情熱が、彼の氷のような心を溶かしつつあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699e/>

COMPASS

2011年1月25日17時11分発行